澤さん、お世話になりました

大槻　文郎

澤さんが宮城県庁に出向なさった平成七年は、私にとっては結構忙しい年でした。十月に夢メッセのオープニング事業として国際デザインフェアと宮城まるごとフェアの同時開催の準備があり、デザインフェアへの国際的な応募を促すために、韓国に行きいくつかの大学の教授や学生にも出品のお願いをしたり陶業組合にもチャレンジしてもらうような活動をしたりしました。みやぎまるごとフェアでは、県内全市町村の参加をいただきながら各地域の加工品を中心とする地場産品の展示販売のほか、食品系の地元の業界団体に参加を促すなど私個人としてはこのようなイベントを仕切るのは初めてにもかかわらず失敗は許されないところで、かなり精力的に仕事をしていたと思います。

十月に夢メッセがオープンし、イベントも無事終わるとかなり脱力感があり、残りの任期は通常業務をこなせば異動かなと思っていましたところ、何ともう一つイベントをやれとのことでした。財政課とのやり取りでは乗り気じゃないような説明に終始してしまったのですが、ハワイ便就航一周年になるので、どこかこの記念行事を引き

受ける組織とすれば私の係しかなかったと思います。予算は十分につけてもらいハワイで物産展をやることになり、年明け一月開催という日程までトップダウンされてきました。この時に初めて常盤化工の常盤さんや横山設計の横山英子さんとお会いすることになりました。

特に常盤さんは、ホノルルまで私費で行ってくれて先方のS百貨店と下打ち合わせをしてくれるなど黒子として信じられないほど活動してくださいました。ところがS百貨店の支社長さんが、なかなかOKを出してくれず途方にくれていたところ、澤次長さんのところで愚痴とも相談ともつかないようにして事情を説明したところ、「その社長の名前は沢というんだろう。だったら自分が電話してやる。」と言って下さりその場から国際電話をしてくれました。日本国の通産省から出向しておられること、同じ苗字であること、宮城県としてはどうしても一月に実施したい事情があることなど実にフランクに、また以前からの知り合いだったのかと思わせるぐらい親しげに話をされました。

相手の沢社長さんも関西出身だったのか否かは確認していませんが、何か通じるものがあったのでしょう。翌日まで回答を留保されましたが、OKとの回答をいただき、翌週には物産振興協会職員二名と私で打ち合わせに飛びました。物産展の開催の目途が付いたところで、ハワイ州政府からも歓迎の意が示され本県主催のパーティに加え、

答礼として州政府主催の歓迎行事があったほか、ホノルル総領事が本県出身の天江総領事だったことから、総領事主催のパーティまでやっていただくなど、前例がないほどの歓迎をしていただきました。なれない事務方としては、結構大変ではありましたが・・・。このようなチャンスを作ってくださったのが澤次長さんだったにも関わらず、ご担当ではないということで澤次長さんをハワイにお連れすることができませんでした。自分でもひどい係長だなと思いましたが、澤次長さんからは嫌味の一つも全くありませんでした。

平成九年には、澤さんは宮城県から通産省に戻られましたが、私はちょうど東京事務所勤務でしたので、時折プライベートの夜の会に来ていただきご薫陶を受けておりました。お誘いするといつも気さくに受けてくださり、若い職員を伴っていても、その職員にも声をかけてくださり、本当に気の置けない方で陰日向のない方でした。

私は、宮城県庁退職後には澤さんが設立に尽力された宮城県情報サービス産業協会の運営にも関わったり、ご来仙の折には昔の仲間たちとの飲み会に参加させていただくなど、細くはなりましたが何がしかのつながりを持てたことに感謝しております。

ただ、残念なことがあります。一つだけきちんと説明しないうちにお会いできなく

なってしまいました。数年前になりますが、県庁職員との飲み会で最後に締めをやれといわれて「いつも役に立たないアドバイスに感謝している。これからもよろしく」との趣旨を説明なしで言ってしまったことを大いに反省しています。正しく言えば、「私の理解力や実行力ではすぐに実現できなさそうな本格的だが難しい解決法をお示しいただいている。一見役に立たなさそうなことだが、いつかアドバイスいただいた方向で解決できるよう努力するので、引き続きアドバイスしてほしい」との気持でありました。空の上から、そんなこと気にしていないよと言っていただいていると勝手に思いながら、これまでのご指導や意見交換させていただいたことに心から感謝申し上げます。

五十八歳ではあまりにも若すぎますが、私のような凡人の三倍ものスピードで生きてこられた澤さんのご業績を思うとき、ただただ、お疲れ様でした、どうぞ安らかにお眠り下さいとだけ申し上げます（澤さんの追っかけ老人より）。

（元宮城県産業経済部、元株式会社テクノプラザみやぎ専務取締役）

澤さんありがとう

佐藤　明

「澤さんが亡くなった・・・」あまりにも早すぎるできごとに、残念でなりません。これからも、いろいろ先を見据えたお話をいただきたかったし、今一度、宮城の美味しい酒を酌み交わしたかった。一昨年、仙台で県庁有志での宴席では楽しく懇談、それから二次会は二人だけでグラス片手にお話をさせていただきました。

昨年の秋、かなり体調は思わしくないと伺っていましたが、一月四日に緩和ケアで自宅静養されている状況を知りました。

少し悩みましたがお見舞いと感謝のメールをさせていただきました。二日後に澤さんからメールをいただきました。

二年間過ごした宮城は、一服の清涼剤であったこと、そして、復興に向けて活躍を・・・・との内容でした。

すぐれない体調の中でのメッセージは、胸が熱くなる内容でした。

その後、「ＮＨＫクローズアップ現代」で、亡くなる直前までの澤さんの生き方を知ることができました。澤さんらしい熱いメッセージが伝わる番組で、改めて澤さんの思いを感じました。その生き方は、脳裏に焼きついており、決して忘れることはな

いでしょう。

宮城県庁を退職し、すでに七年も経過しようしている私にとって、溢れる才能と若くしてあの貫禄、スピーディーでアイディアマン、そして的確な仕事ぶりは今でも印象深いです。

県庁時代、二人だけで出張したことがありました。大崎市の企業訪問（どの企業に行ったか記憶にありませんが）のあと、鳴子温泉「ゆさや」の「うなぎの湯」に・・・、かなり熱くて、二人で水を入れて、船頭スタイルでかなりかき混ぜながら入りました。（まさに裸の付き合いでした・・・）

宮城のデザイン団体を対象に、講演もいただきました。デザインの重要性と同時にデザイン開発の経費と製品に占める割合を問いただし、デザインに対する考え方や費用対効果についてお話をされました。これまでの講師にはない、しかも役人にはない、デザインに対する持論と視点を持っている方でした。

東日本大震災からの五年を経過しましたが、宮城の復興はまだ半ばです。今後は復興と合わせてイノベーションから地域資源の再生、そして人づくりなど地域創生に向けた活動が重要とされております。まさに県庁時代に澤さんが提言したそのものです。

これまで、多くのアドバイスをいただいた澤さんに心から感謝申し上げます。澤さんありがとう・・・・。

（現在：東北工業大学ＣＯＣ推進室プロデューサー、元宮城県産業経済部）

終曲は、第三楽章プレストで

高橋　信哉

澤昭裕氏が宮城県商工労働部次長で居られた時、私は県の各部局そして関係団体の予算執行結果等を監査する部局にシフトしていました。従って澤氏が県に在任中の氏と私の接点は殆んど無かったのです。しかし氏がコーディネートし、産学官の議論を踏まえて策定された「産業振興アクションプラン」は、当然ながら監査する上でも必要な情報が満載で重宝しました。

個人的には私は昭和三十九年に県に入り工場誘致やモノづくり支援、更には工業試験場建設計画にも拘わりました。ということで商工労働部勤務が長かったことから、当該アクションプランは策定途中の議論の様子も概略は耳に届いておりました。監査の関係者も当該プランの基本コンセプト、目指すべき方向、到達すべきゴール、さらには各プロジェクトの5W1Hの概要把握に意を用いたことは申すまでもありません。

通産本省に戻った氏は工業技術院人事課長でした。あの頃の氏は、国研（国立研究機関）のミッションは「研究」である旨を声高に語り、精力的に旗振りしていたとの印象でした。都道府県技術センターのミッションが企業からの依頼で動き出す試験・

研究であるなら、国研はリスクの高い、誰も手を付けていない分野での研究開発にシフトすることこそが、グローバル展開の中でのミッションだと私も感じていました。

さて澤昭裕氏との出会いで一番の想い出は、私が監査部局を離れ、宮城県産業技術総合センターの前身である宮城県工業技術センター所長で居た頃の一齣でした。

上京した折にアポイントを取って、私は霞が関の工業技術院に氏を訪ねました。予想に反して人事課長室は大部屋ではなく広い個室で、応接ソファーも置かれていました。あの時、宮城のアクションプラン絡みで会話した中身は私のメモリーにはモウありません。コーヒーを頂きながらの最後は趣味の話だったと思います。立ち上がって課長室からおいとまする時、部屋の出口で澤氏が口にした一言が、忘れ得ぬ一言でした。

『とにかく第三楽章プレストで頑張りましょうよ!』

この言葉だけが今でも脳裏にしっかりと刻まれています。おいとまの動きの中での一言だったので、歓談中の一言では無かったので「エ、何の事ですか?第三楽章とは何ですか?」と聞くのも間が抜けていると思い聞き流したのです。人生の先達が説いてます。

『大事なのは「こころ」です。しかしもっと大事なのは「ことば」です』と

あの時、音楽で癒やされる辺りまで話が広がったかどうかも定かでありません。い

つか機会があったら訊こうと思っていましたが、最早それも叶いません。

しかし澤氏とイコールではないかもしれませんが『第三楽章プレスト』が何の事だったのか、私なりに具体の事例で答えることは出来ます。そしてその答えは当たらずとも遠からずだと確信しています。

『ベートーベン・ピアノソナタ嬰ハ短調「月光」／第三楽章（終曲）』

これが私の答えです。「とにかく御互いに頑張りましょう」を強調すべく『月光の曲／第三楽章』に言い換えたということでしょう。

実は私は学生時代からジャズが好きで、仲間とカラオケに行けば率先してスタンダードナンバーを歌います。しかしクラシック音楽は素人。それでも「癒し」が欲しい時はジャズでなく、ショパンやリストやベートーベンのポピュラーなピアノ曲をBGM的に自室に流します。

澤さんのクラシック音楽への造詣云々はこの際問題ではありません。例えクラシック音楽が苦手な人でも沢山の人が『ベートーベン／「月光」』は耳にしているし、私も然りだろうと思って、澤さんは補足説明抜きで『第三楽章プレスト』と私に発したに違いありません。『澤さん如何でしょうか？私の推論は間違いですか？』

ついでながら「月光」（月光の曲）の第一楽章は超有名で、静かに心の琴を叩き爪

弾く感じだし、更に第二楽章からスピードが上がって、終曲の第三楽章はこれが「プレスト」だと言わんばかりの苛烈というか壮烈というべきか、凄まじい波動が伝わってきます。「月光」の第三楽章に触れた時の全身に染みわたるあの感じこそ、そして揺さぶられ高揚するものこそ「男」のパワーとロマンの象徴に思えます。畏敬すべき男の終曲だろうと思うのです。

以上、澤氏の突然の訃報に接した時、私の脳裏に浮かんだ事どもをザックバランに書き落としました。これをもって「追悼の言葉」とさせていただきます。心から御冥福をお祈り申し上げます。　合掌

（追伸）澤昭裕さん！ エネルギー問題等でテレビ討論に出演されていた貴男を何度かお見受けしました。澤さん！貴男の人生は正に第三楽章プレスト人生とお見受けしました。それから偶然とは申せ、ベートーベンと殆んど変わらない享年にも驚かされました。どうぞ安らかにお眠り下さい。残駆天の赦すところ、私も己のＰＬＡＮそしてＤＯに汗を流して参ります。勿論終曲は私の場合はプレストではありません。

澤昭裕さん、お世話になりました。本当にありがとうございました。

（元宮城県工業技術センター所長、元株式会社テクノプラザみやぎ専務取締役）

産業政策の師　澤　昭裕　氏

千葉　隆政

私が最初に澤さんを意識するようになったのは、平成十二年四月に宮城県産業経済部産業経済総務課産業政策企画班に配属になり、商工労働分野の産業政策立案の担当になってからです。当時は平成九年三月に策定した「宮城県産業振興ビジョン」に掲げた「みやぎ産業振興機構」の設立などの構想が実現し、まさに、ビジョンで立案した仕組みが整い、実行段階に進んでいる時期でした。

このビジョンの策定を指揮していたのが平成七年度から二年間、経済産業省から宮城県に商工労働部次長として赴任していた澤昭裕さんでした。ビジョンの策定を担当した直属の上司である産業経済総務課吉田副参事（今の宮城県経済商工観光部長）より、澤さんから多くの指導をいただきビジョンが完成したことなど数多くのことを聞きました。

私は、平成十二年度から十五年度まで四年間にわたり産業政策企画班に所属し、「宮城県産業振興重点戦略」や「みやぎ産業振興ビジョン」などの企画立案に従事しましたが、常にその底流にあったのは、「宮城県産業振興ビジョン」で強く打ち出した「内

発」重視の考え方でした。

この頃、澤さん来仙の折り開かれる「懇親会」によく参加するようになり、澤さんに顔を覚えてもらっている位の関係にはなったかと思います。

平成十七年十一月に浅野知事から村井知事に代わりました。そのタイミングで、私は、秘書課から、平成十五年当時の産業政策企画班が組織強化されていた「産業政策推進室」に出戻りました。当時村井知事が打ち出した「みやぎ経営戦略会議」について、まずは、産業政策の議論をすると言うことで、目黒主幹（現医療整備課医療政策専門監）と私が、主に担当することとなりました。

この会議は、「富県戦略」を掲げた村井知事の産業政策の基礎となるものであり、その重要性から、宮城県の産業政策の祖とも言える澤さんにご助力をいただくこととなりました。澤さんが当時勤務されていた「東京大学先端科学技術研究センター」に幾度か伺い、会議の進め方や澤さんにアドバイザーとして毎回出席していただくことも含めた出席者の選定など様々な相談をさせていただきました。

この会議は平成十七年度から十八年度にかけて、六回にわたり開催し、出席者から宮城県が展開すべき産業政策などについてご提案をいただくとともに、多くの方々には、「総合計画審議会」など県政の重要な議論の場で委員としてご活躍いただくこと

となりました。この会議の議論の成果については、村井知事の政策の基本方針として平成十九年三月に策定し「宮城の将来ビジョン」の最初の柱である「富県宮城の実現」にしっかりと反映させることが出来ました。

その後も、平成二十年度には宮城県が作製していた政策情報誌「政策の風」で、エネルギー問題を扱うことになり、それに掲載する職員の対談のコーディネーター役も務めていただきました。

澤さんは、経済産業省退職後、経団連の研究主幹として、エネルギー政策を中心にご活躍されていましたが、このような繋がりのおかげで、その後も、個人的にいろいろ相談したりできようになり、産業政策をはじめ、県政の政策分野に携わることの多かった私としては、数多くのご示唆をいただくことが出来ました。東京出張に行った際に、原宿北参道の「三澤」のオフィスにお伺したことなど思い出されます。

東日本大震災以後には、あまりお目にかかる機会は少なくなりましたが、澤さんは宮城県の政策に様々な影響を与えており、私自身は、「産業政策の師」と思っております。そのような澤さんが、若くしてこの世を去られたことは大きな残念でなりません。ご冥福をお祈りいたします。

（現在：宮城県健康福祉部次長）

澤先生、ありがとうございました。

目黒　洋

今から十年前（平成十八年）の梅雨入り直前の頃だ。仙台駅前の小綺麗な居酒屋で乾杯して程なく、澤先生が言った。「目黒ちゃん。君って、おバカじゃない？」

目には優しさがあり、口調も軽かったが、真剣だった。「僕はさ、十年前は仙台に住んでたけど、今は東京の人なんだよね。東京の人が、仙台、宮城に行く楽しみって何だか分かる？宮城の美味しい食べ物なんだよね。ここの（店の）食べ物がまずいってことじゃなくて、ここのは東京でも食べられるものじゃん。余所から宮城に来た人を、宮城のファンにするには、宮城に行かなきゃ食べられないもの、刺身でも、肉でも、野菜でもさ。高級なものじゃなくとも幾らでも宮城には美味しいものあるでしょ。そういうのを出す店に連れてこなくちゃ。宮城県の振興に携わる県職員としては、基本でしょ。」

澤先生と知り合ったのは、平成十七年の晩秋。当時、私は、産業政策振興室に勤務していて、産業振興を掲げて就任したばかりの村井知事の公約実現に向けて、実効性のある政策を立案するミッションが下されていた。その時、初めて澤先生とお会いした。（詳しくは、千葉隆政次長の寄稿を御参照してください。）この頃、澤先生は、経

済産業省から東京大学先端科学技術センターで教授をされていた。だから、私にとっては、いまでも先生だ。

それから、半年以上、何度も澤先生とやり取りをさせていただいた。

当時、私も澤先生も喫煙されていて、喫煙者同士という親近感もあった。（しかも、私と同じ銘柄のタバコ：プレミアワンを吸われていた。）既にタバコは喫煙所で吸う時代だったが、一緒に喫煙所に行くと、仕事と直接関係のない話も沢山伺えた。

仕事で、どうしても澤先生のアドバイスが欲しくて、夜中の一時過ぎに何度か相談メールを送ったことがあったが、必ず翌朝には（というか当日の朝には）返信メールがあって、何度も助けていただいた。（澤先生って、いつ寝てるんだろうとも思った。）

半年以上も経って、かなり気心が知れてからの、澤先生の冒頭の言葉だった。

目から鱗が落ちた。自分としては、それなりにセレクトしたお店だったが、慢心というか油断していた。それを、はっきり気づかせてくれた。私が四十一歳、澤先生が四十八か四十九歳の時だ。

それから十年、いろいろ教えてもらった。澤先生と出会って、仕事に対する姿勢やモノの見方がかなり変わった気がする。

「まず現場。現場を見ること。」

「現場だけでなく、その企業・工場までのアクセスがどうかとか、その道中にどんな事業所がどれくらいあるのかも見ること。」

「おまえの文章、くど過ぎ。ツイッターやってみな。百四十字以内で、自分の意図するところを、相手に確実に伝わることが大事。」

「ポンチ絵より、テキストで説明できるか。」

「発案とプロジェクト化は別物。」

「自分は何をして、上司部下をどう使うか。サブロジの上手下手で全然違ってくる。」

「一〇〇％安全といった話はあり得ない。どこで妥協するか、それが納得できるかの問題。仕事も同じ。その妥協点は、時代や環境で変わるから注意が必要。」

数え切れないくらい教わった。（まだ全然身についてないけれど・・・）

東日本大震災から半年以上経った後、夜、自宅で電話を受けたことがある。「今さ、使用済核燃料棒の保管施設の設置場所の候補地について、仲間と議論してるんだけど、現地の人の感触をつかみたくて。目黒ちゃんはどう思う？」私は、その時、放射能廃棄物とは関係のない部署に勤務していて、全く知識を持ち合わせていなかったので「よく分かりません。」と一旦は答えた。「そうじゃなくて、目黒ちゃんって、左に寄ってるとか、右に寄ってる訳じゃないし、ヒステリックに物事を考えるタイプでもないや

ん。一般的な宮城の住民の感覚として、目黒ちゃんに聞いてみようと思ったんだよね。」

私は、自分なりに知り得る情報と感覚だけで、役に立つとも思えない回答をしたが、それ以上に、澤先生から電話をもらったことが嬉しかった。

ほかにも、一～二年に一度、澤先生と県庁職員（ＯＢ含む）とで懇親会を開いたり、個人的にも二～三回、澤先生と飲んで、いろんな話を聞かせてくれた。

とにかく、澤先生と接触すると、いつも優しく何らかの気づきを与えてくれて、それが楽しく、嬉しかった。

澤先生、本当にありがとうございました。

（現在：宮城県保健福祉部医療整備課医療政策専門監）

澤さんの思い出

吉田　祐幸

【澤さん着任】

澤さんは、平成七、八年度と宮城県商工労働部に産業政策担当の次長として着任されました。川内の県宿舎に住まわれて、新任地での芝刈り体験の新生活を楽しんでおられました。ゴルフの時は、パナマ帽子をかぶりながらすいすいとコースを回り、宿舎が庭付きだったので芝刈りが大変だとよくこぼしてました。私は、同じく平成七年度に企画調整担当の係長で着任しました。私の仕事は、商工労働観光行政に係る企画や議会調整、予算決算を所管する係長です。上司は、課長補佐、課長が間におりましたが、業務の関係上、澤次長から直接指示を受ける機会に恵まれました。

私自身、商工労働行政は初めての経験でした。それ以来、産業振興の仕事に縁がありまして、この二十年間で通算十四年間を産業振興部門で勤務することになりました。このような経緯で、私にとりましては、澤さんから受けた産業政策の指導が、とても鮮烈で印象深いものでした。最初でかつ最高の指導者だと今でも尊敬しています。

【本県の人事配置に疑問】

澤さんが着任早々、四月にこんなことがありました。「さっそく企業訪問したいので、訪問すべき企業リストを作ってほしい。」というオーダーでした。関係課からの情報をもとにリストにしてみましたが、企業の実情がグリップしきれていない平凡なメモだったことが不満だったようで「宮城県は、福祉をやっていた人を産業政策の企画に回すのか？」と問われました。私の例でいえば、初めての福祉分野で係長を終えて、初めての産業振興分野の係長となったのですが、当時のジョブローテーションの通例でした。一方で、部として組織的な強みを発揮する面ではこの人事制度は弱かったと思います。この時の経験は、強く印象に残っておりまして、その後産業政策に通じた職員のスキル蓄積・向上に意を用いることになります。

【企業訪問でのエピソード】

その後、澤さんは、半年くらい精力的に企業経営者を訪問していました。私たちも、幸いに同行させていただきましたので、現場指導のような形で、企業経営者との会話や工場視察のポイントを教えていただきました。同じ業界を三、四社回ると「QCD」や業界の課題などが分かってきます。ある時、澤次長が、出張の帰路にオーディオ製品を作っているM社に飛び込みでアポイントもとらずに訪問したことがありました。本社の人を知っていたようなのですが、そこでの発言が、「オーディオのような競争

力のない製品をいつまで作っているのですか。もっと高付加価値製品に切り替えないとだめじゃないですか」と話しかけるのです。私たち職員はあっけにとられて聞いていました。よく初対面の人にここまで踏み込んだ話ができるなと感心したものです。それでも相手を怒らせずに対話が成り立つところが澤さんらしいところです。このようにして企業訪問での学びの重要性、楽しさ、即行動に移す大切さを教えていただきました。やがて、澤さんの二年目には、私たち職員が自ら企業訪問をやりだして「自分を連れて行ってくれない。」と言われたりしました。澤次長は、この企業訪問期間で、ものづくり経営者や関係団体の方々の心をしっかりグリップしたので、後に多くの講演依頼がきて、そちらで忙しくなったのです。講演の枕には、よく「大企業病」の話をしてました。

【現場実情把握と即応性】

また、当時は、空洞化対策が課題でした。「居ながらにしての空洞化」、「ヒト、モノ、カネ、情報」支援、「結果責任と説明責任」などの澤節が職員にはとても新鮮で部内で言葉が浸透していきました。澤さんは、中小の工場経営者から聞いてきた「資金を借りる際の担保設定の難しさ」の話があったので、このハードルを下げる点をポイントにして施策化したのです。後で電話で「あの時の話施策にしました。」と報告した

ら「あまりの速さにびっくりした」と返事があったようです。現場実情把握と即応性は、産業誘致の職員中心に根付いてきたように思います。

【組織改革】

また、水産加工業が水産庁と経済産業省、農林水産部と商工労働部の政策の隙間に入ってしまい、十分な政策手当てが受けられない状況があることや、県レベルでは、産業政策の川上から川下まで実情をグリップして、目が行き届いた政策が不十分であることを盛んに主張されていました。これがやがて農林水産部と商工労働部を統合する産業経済部へと大組織改革につながります。残念なことに、組織的には、澤さんが構想した産業政策に特化した部を作ることができませんでした。例えば、農業土木のインフラや試験研究機関も整理整頓できないままの大産業経済部になってしまい、スピード感のあるマネジメントができなくなってしまい苦労したものです。特に、冷害と産業再生戦略を同時に行う年度には苦労がありました。現在は、農林水産部と経済商工観光部の二部に分かれています。

【先端情報のシャワー】

さらに、「産業振興アクションプラン」の作成の際には、具体例による実証と迅速

な対応姿勢や産業振興にかける意識高揚が図られました。この当時の学びで本県では、大正時代のA社への経済界の投資失敗があり、「工業には懲りた」という歴史があったことも初めて分かりました。また、澤さんの人的ネットワークにより、大企業の副社長クラスが直接委員を引き受け、参加していただき、宮城県職員は、電気電子・IT業界の最先端の情報のシャワーを浴びさせていただきました。当時、会合の際には、副社長クラスの委員と対等に対話してやりとりをする澤さんの姿が思い出されます。

【澤さんの宿題と財産】

私自身は、今でも、二年余り在籍した澤さんからいただいたご指導が感動体験で、得難い出会いをさせていただきました。とてもありがたいことに産業振興の仕事の喜びを体感させていただいたのです。それとともに、当時の澤さんからいただいた宿題をいまだに解き続けているような気もしています。例えば、

① 私が平成十四、十五年度に産業経済部総務課課長補佐の時には、先ほどの水産加工業や食産業ビジネスの川上から川下まで一貫した支援の流れ構築の問題意識もあり、食産業課を設置しました。また、今回の震災復興の局面では、水産加工業の販路開拓、生産性の向上、経営改善が大きな課題となっており、平成二十八年度に県産業振興機構に水産ビジネス支援チームを作りました。水産加工業を水産業として

の視点だけでなく、ものづくり産業の観点からもとらえ直して生産改善・経営改善の促進、販路開拓、ビジネスプランのブラッシュアップ、伴奏型支援の徹底を目指しています。あの当時の議論、問題意識に対してまだ手をうってなかったのかと澤さんからお叱りの言葉がありそうですが、なんとか宿題に対応しようと取り組んでいるところです。

② 平成十六年度からは、自動車プロジェクトチームを設置して、本県企業との取引拡大、組立て工場の誘致にとりくみました。澤さんの次長時代は、自動車会社の工場立地が決まっていたものの、何度となく建築着手の延期がされていました。その当時、澤さんから「早期の工場建設着手を強く申し入れしないと、相手から宮城はやらなくていい場所だと思われてしまう」という発言がありました。このため、部長以下、訪問を続け、「しずって」いたところです。このことが実を結んだのか、平成九年に直営工場ができ平成十年からの操業につながりました。このことが、後の展開にきわめて重要な役割を発揮します。後に、W社長（当時は常務）が何度となく宮城に工事着手の延期の話をしていて、「嫌な役回りだった。当時、宮城と北海道の申し入れがとても強かった。」とおっしゃってました。

現在の村井知事が就任した当時、企業経営者との意見交換の際に、澤さんが数回に亘り司会役・コーデネイト役だったのですが、私たちからみれば、澤さんの助言

も効いて立地していただいた直営工場のS社長から熱く自動車産業の集積について語っていただき、その後数多くのフォローを受けながら、今日の自動車産業の集積につながっているのです。

③　その後、数多くの自動車関連企業訪問を行い、貴重な情報と出会えたのも澤さん時代に鍛えていただいたノウハウのおかげでした。私達の中では、現場実情の把握、施策立案、実行といったサイクルの徹底は平成七年以降身についた仕事のやり方です。当時一緒にやっていた仲間や、その後多くの後輩がその重要性に気づき、楽しみを見つけ、成長していく様をみるにつけ、澤さんの残してくれた財産の大きさを改めて感じている次第です。

このように私達の中では、澤さんの指導や行動イメージの基に施策してきている印象もあり、私自身は宿題を解き続けている思いであります。

澤さんからは、県庁を離れてからも、よく「宮城は、いい政策をやっているのにヒット、ホームランが少なくて気の毒だ。」と言ってました。大型誘致が決まった時に「やっとホームランにつながりました」と澤さんに報告出来たところです。「せっかくの自動車の集積をもっと大きいものに、また、自動車に限らずに航空機等乗り物関連ビジネスにこだわって集積していったらどうか」というのが昨年九月の最後のアドバイス・宿題になりました。

【離任後の業績】

澤さんが、宮城県庁を離れてからも、当時の職員との結びつきは続きました。折に触れて仙台で懇談の場を設けさせていただいたほか、県庁の情報誌「政策の風」への寄稿や講演会での講演など、お忙しい中宮城からの要請に快く応えていただきました。貴重な寄稿の内容等についてもこのような機会をお借りしてご紹介させていただきます。

また、三・一一の震災直後の四月五日には、澤さんからアドバイスがありました。「地元での産業復興のために電力確保しっかりやってくれ、中長期的に見た産業復興の発信の仕方も重要だ。」まずは、①金融つなぎ支援、②沿岸部の町の復興と地元の雇用をセットで、行政で多くの採用と仕事化、③T電力に地元貢献を求める。金でなく人や車で協力姿勢を求める。

【前向きに倒れる】

澤さんの仕事の口癖は、どうせやるなら「前向きに倒れる」でした。有言実行を最後まで貫き通したと感じています。平成二十七年九月に仕事のアドバイスをいただき

に経団連ビルにお邪魔して、相変わらずの澤節をきけたと喜んでいました。十一月には、仙台に出張があるということでしたので、久しぶりに皆に声がけして飲もうといっておりましたが、残念ですが実現しませんでした。最後は、一月にメールでやりとりしたところです。世田谷の告別式に出席させていただいて、お別れできたことがついこの前のことで、もう五月になったのかという思いです。メールには「やるだけのことはやっておきたい」と書いてありました。「クローズアップ現代」で詳しく知ったので、そういう意味だったのかと、澤さんらしいと今でも思っています。

私共宮城の心の支えとなってくれている澤さんに本当に心から心から感謝を申し上げます。「第二の故郷」宮城の産業復興の希望と未来を見つめ続けて下さい。

（現在：宮城県経済商工観光部長）